

令和 6（2024）年度

洗足こども短期大学
自己点検・評価報告書

令和 7（2025）年 6 月

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1. アセスメントポリシー各区分の点検	
1) アセスメントポリシー・・・・・・・・	2
2) 入学前・入学時・・・・・・・・	3
3) 在学中・・・・・・・・	4
4) 卒業時・卒業後・・・・・・・・	7
2. 令和6（2024）年度改善・対応を要した事項等・・・・・・・・	9
3. 令和6（2024）年度自己点検シート・・・・・・・・	11
4. 令和7（2025）年度以降改善・対応を要する事項等・・・・・・・・	15

【資料】

1. 入学前・入学時アセスメント資料
基礎力リサーチ, 「新入生の皆様へのアンケート」, 入学試験結果
2. 在学中アセスメント資料
GPA 評価 学外実習評価 授業改善のためのアンケート 成績分布 退学率・休学率 履修カルテ ディプロマポリシー達成度
3. 卒業時・卒業後アセスメント資料
学位授与率 就職率・進学率 人材ニーズ調査 「卒業する皆様へのアンケート」 免許資格取得率 履修カルテ

はじめに

令和 6（2024）年度の自己点検・評価に関しては、令和 5（2023）年 5 月に制定した「アセスメント・ポリシー」に基づき、学習成果に関する評価を「入学前・入学時」「在学中」「卒業時・卒業後」に分けて、定めた評価項目による検証を実施しました。

また、令和 5（2023）年度の自己点検・評価報告書に基づいて対応した事項を「令和 6（2024）年度改善・対応した事項等」に取り纏めました。

併せて令和 6（2024）年度の自己点検シートの作成に際しては、第 4 評価期間から適用される短期大学評価基準に基づいて実施の上、「令和 7（2025）年度以降改善・対応を要する事項等」として、今後の要改善・対応事項等の内容を示しました。

短期大学を取り巻く環境は、引き続き大変厳しい状況にありますが、本学では教育の質保証のさらなる向上の観点から、令和 7（2025）年度の入学者より入学定員を減員しましたが、今後も適正な入学定員の見極め等を続けてまいります。

併せて、短期的のみならず中長期的な視点も持ちながら、経営基盤の維持・強化を図り、教育研究活動の質保証の継続的な改善・向上に向けて全教職員で取り組んでまいります。

令和 7（2025）年 6 月

洗足こども短期大学 自己点検・評価委員会 委員長
洗足こども短期大学 学長 落合 俊文

洗足こども短期大学 「アセスメント・ポリシー」

洗足こども短期大学では、教育の質を保証する3つのポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）を基礎に評価指標を定め、学生の学習成果を可視化する目的で、以下の通り、アセスメント・ポリシーを定めます。

	入学前・入学時 アドミッションポリシー に基づく検証	在学中 カリキュラムポリシーに 基づく検証	卒業時・卒業後 ディプロマポリシーに基 づく検証
機関レベル	- 入学試験結果 - 基礎カリサーチテスト - 新入生の皆様へのアンケート	- 退学率、休学率 - GPA 分布 - 履修カルテ - 学外実習評価	- 学位取得率 - 就職率、進学率 - 免許・資格取得率 - 履修カルテ - 卒業する皆様へのアンケート - 人材ニーズ調査（原則3年毎実施）
教育課程レベル	- 入学試験結果 - 基礎カリサーチテスト - 新入生の皆様へのアンケート	- 退学率、休学率 - GPA 分布 - 履修カルテ - 学外実習評価	- 学位取得率 - 就職率、進学率 - 免許・資格取得率 - 履修カルテ - 卒業する皆様へのアンケート - 人材ニーズ調査（原則3年毎実施）
科目レベル		- 授業改善のためのアンケート - 履修カルテ - 成績分布	

* 本学は単科の短期大学であるため、機関レベルと教育課程レベルの項目は重複する。

1.＜入学前・入学時＞

項目	現状	課題	必要とされる対応
入学試験結果	(2023年度入試・2024年度入試・2025年度入試結果等) ・入学試験合格率(合格者数/志願者数)は、2023年度～2025年度入試の順に、99.5%・100.0%・99.1%となっており、特に2024年度入試においては、全員入学の水準となった。 ・総合選抜試験の実質的な合格率を示す認定率は、93.1%・100.0%・92.2%となっており、引き続き毎年度90%～100%の高い水準である。 ・入学定員充足率は、78.4%・72.0%・71.3%と毎年度低下を続けている。	・志願者数の継続的な減少による入学定員充足率の低下に伴い、入学試験合格倍率はいわゆる全入の水準を引き続き示している。 ・上記により、入学を受け入れる学生の学力水準等を的確に把握し、2年間の高大生活で効用に育ていくのかを引き続き検討していくことが大きな課題である。 ・併せて、アドミッションポリシーに沿って入学を受け入れる学生の質を保つために、2025年度より入学定員を250名から150名へ引き下げたが、入学定員充足率は71.3%と更に低下する結果となった。	・入学直後の5月に毎年実施する「基礎力リサーチテスト」(アセスメント・ポリシーの項目の一つ)のより有効な活用方法を検討し、入学後2年間の学習指導に有効活用していくことが引き続き重要である。 ・毎年入学前に実施している「入学予定者オリエンテーション」に関して、左記の課題も踏まえながら、引き続き一層の内容の向上を検討していく。 ・2025年度入学者より、入学定員を250名から150名に減員したが、今後も引き続き適正な入学定員の水準の見極めを検討していく必要がある。。
基礎力リサーチテスト	181名が受験 【基礎学力】 ・2024年度入学生の平均点65.7点、前年度66.7点、前々年度66.1点、今年度全国平均67.5点、全体には例年通りの学力、全国平均とほぼ同程度といえる。 ・50点以下の学生が34名と181人中18.8%で増加した。前年度は193名中26名で13.5%であった。 ・49点以下の学生が32名と181人中17.7%で増加した。(前年度22名、11.9%) ・40点以下の学生が12名と181名中6.6%で増加した。(前年度9名、4.7%)この12名は、優先的なフォローが必要である。 ・40点以下は、1Aに3名、1Bに2名、1Cに3名、1Dに1名、1Eに3名 分野別に見ると、想像と論理的読解力の正答率が例年より1%以上下がっている。読解力が66.1→63.5、論理的読解力が79.2→75.9%。 平均については2021年度(64.7)、2022年度(66.1)、2023年度(66.7)、2024年度(65.7)でテスト得点の平均はほぼ変化なし。 【進学意識】 ・アンケートA01「現在の専門分野を目指すとした場合」は「高校入学より前」が45%で、全国平均とは異なる(高校入学前は16%)が、例年と同程度であった(前年46%、前々年45%)。 ・アンケートA04「本校に行こうと決めた時期」では多い順に「高校3年生1学期(30%)」「高校3年生2学期(27%)」「高校2年生(21%)」であった。例年と変化はなかった。 ・アンケートA05「進学先として本校を選ぶ際に重視した項目(複数回答)」では多い順に「オープンキャンパスの印象(71%)」「魅力的なカリキュラム(44%)」「学校生活が楽しそう(39%)」「自宅から近い(34%)」であった。 ・アンケートA06「進学先として本校を選ぶ際に設立したメディア(複数回答)」では多い順に「学校パンフレット(73%)」「学校ホームページ(64%)」「SNS(21%)」であった。SNSに関しては前々年6%、前年16%と急激に伸びている。 ・アンケートA10「A10. この進路を選ぶ際に相談した人(複数回答)」では多い順に母親(89%)、担任の先生(67%)、父親(44%)であった。 【学習習慣】 ・アンケートNo16「現在の授業時間以外での1日の平均学習時間」は0時間が10%(前年19%、前々年18%)、30分以上1時間未満が38%と最も多く、全国平均(0時間が41%、30分未満が30%、30分から1時間が18%)と比べても2024年度の1年生は学習時間が長い。 ・アンケートNo23「提出物を期日までに提出している」に「ほぼ毎日」でもあてはまる」62%、「まああてはまる」35%と回答(前年62%、65%)。 【モチベーション】 ・アンケートNo30「将来、創きたい職業が決まっている学生(65名、前年70名)のうち、その理由」では、多い順に「他の職業に興味がある(38%)」「長く続けられる自信がない(32%)」「仕事内容の責任が重い、大変と感じる(31%)」であった。	・50点以下の学生が増加した。小学校低学年レベルの基礎的計算や文章読解力に乏しさがみられるため、授業にて注意を要する可能性がある。 ・49点以下の学生が増加した。「3人」に1人の割合で進学を検討する傾向があるとのことで、授業、面接等で様子を見ていきたい。 ・40点以下の学生が増加した。優先的なフォローが必要である。一般に進学意向が4割以上と高くなるることである。 ・2021年度、2022年度、2023年度でテスト得点の平均はほぼ変化なし、しかしながら、2023年度は得点のピークが2つとなっており、二極化傾向に○学習習慣についている傾向がみられる。これは入学後にオゾンマインドや課題、フォーラムなど、授業時間以外で学習に取り組む姿があるのではないかと考えらる。 ○提出物の提出状況は前年同様、質的に良い。期日を守る指導が徹底していることは、本学のよい特徴といえる。 ○前年、前々年と変化はないが、卒業後のフォロー等「いつでも相談できる等」があることを示すと、進学者の減少や保育者志望度の高い学生の増加も見込めるのではないかと。 ・将来教育職以外に興味がある学生や、保育職の職務内容についてネガティブにとらえている入学生が少なからず存在する。	1. 2024年度の1年生は、全体には全国平均レベルで、例年と同程度の学力であるが2極化傾向にある。そして低学力な学生の割合が増加している。読解力読解力などを文章表現授業などで担任がフォローする、ベータックコース学生をより手厚くするため少人数にする等の対策が考えられる可能性がある。卒業後教育職に就くことに引いて不安な状況で入学してくる学生も少なくない。そのような学生の不安を解消し進学になることを防ぐためには、在学中から卒業後のフォローまでいつでも相談できる短大システムのさらなる確立や、そのアピールも考えられる。 2. 高校入学以前に進路を決めている入学生も多いことを考えると、本学の受験生を贈やすという観点からは、中学生や小学生への保育者の魅力と振るようなイベントも効果がある可能性がある。ほかにも、近隣の高校2～3年生への出校授業や出張ガイダンス、オープンキャンパスへの招待、SNSのさらなる活用、オープンキャンパスや出張授業で保護者や担任の先生にパンフレットを渡すことなども考えられる。
新入生の皆様へのアンケート	【2024年度新入生アンケート結果より】 オープンキャンパスに参加して興味をもった66.3% (67.5%・70.5%)、学校の施設に魅力を感じたから57.9% (51.3%・53.4%)と半数以上の学生が回答。本学のイメージについては、89.9% (88.0%・90.2%)の学生が「音楽が盛ん」と回答している。また、本学に期待することのコメントは、コメント件数の半数が、ピアノや音楽・表現系をはじめとする「授業関係」のコメントとなっている。一方で78.1% (76.4%・79.9%)の学生が「授業・学習が理解できるか、ついていけるかどうか」と不安を感じている。「友達や仲間ができるか、人間関係がうまくやっけるか」39.9% (36.0%・68.6%)と「新しい生活環境に适应できるかどうか」48.9% (51.8%・63.3%) については、減少傾向となっている。	①授業内容の充実。 ②「授業・学習が理解できるか、ついていけるかどうか」と不安を感じている学生へのサポート等が課題。	①集計結果を教団会で報告し共有する。 ②入学前教育から初年度教育の検討。

2. <在学中>

項目	現状	課題	必要とされる対応
退学率・休学率	【2021年度】在籍学生589名中 休学者6名（1.02％） 退学者21名（3.6％） 【2022年度】在籍学生 573名中 休学者6名（1.05％） 退学者19名（3.3％） 【2023年度】在籍学生455名中 休学者4名（0.88％） 退学者19名（2.6％） 【2024年度】在籍学生374名中 休学者9名（2.4％） 退学者13名（3.5％） 現時点では、休学に至るまではクラスアドバイザーが面談等を重ね、ときには保証人を交えて話し合いをもっている。手続き後は保証人にお任せし、退学の意向が出た際はクラスアドバイザーとの面談、その後の進路指導等を行い、学長や事務局長の面談などを経て、退学の意向を確認し手続きに移行している。	在籍学生数は減少しているが、休学者数は増加し、退学者数は減少している。退学者数の減少については、アドバイザーの指導などの支援策が効果をあげているのではないかと思われるが、学生が学業を続けるための支援を求める傾向が強まっているとも考えられる。	学生や保証人の多様なニーズに対応した支援策を強化することが求められる。
GPA分布	【2023年度入学生（1年・2年次）の分析】 ・GPAは1年次平均、2年次平均ともに変化なし。（平均2.22→2.24） ・GPAの散らばりは、2年次になり多少小さくなった。（標準偏差.450→.416） ・1年次はGPA1.98以下が下位4分の1群、2年次はGPA2.02以下が下位4分の1群となる。 ・GPAの分布は、成績良好群・不良群というほどには分かれなかった。 【2024年度入学生（1年次）の分析】 ・GPAは1年次平均2.28であり1・2年前の1年生と比較して高い。（2022年度入学生の1年次は2.21、2023年度の1年次は2.22） ・GPAの散らばりは、.42であり1・2年前の1年生と比較し均質になっている傾向がある。（2022年度入学生の1年次は.49、2023年度の1年次は.45） ・GPA2.0以下が下位4分の1群であり、2年連続で評価が多少高くなっている。（2022年度入学生の1年次はGPA1.96、2023年度の1年次は1.98）	2023年度入学生も、2024年度入学生も、GPAからみると成績良好群・不良群というほどには分かれておらず、全体に例年通りであるといえる。しかし、2024年度入学生の1年期末のGPAは前年、前々年と比較し多少高くなっている。 ①今年（2025年）の2年生の昨年度の学業への意欲や達成度が高かったり、授業態度や出席率が良かったりする可能性も考えられる。 ②今年（2025年）の2年生には保育者志望度の低い学生の在学が少ない可能性も考えられる。 ③学校の教育方針、方法が定着し学生がどの授業においてもそれに納得して意欲的に学んでいる可能性も考えられる。	引き続き、成績評価の考え方を専任教員・非常勤教員で共有する。
履修カルテ	<2024年度入学生(1年次)の回収率>100% <ディプロマポリシー(DP)6項目に対する達成度> 順に「全くできていない」「あまりできていない」「ある程度できている」「おおむねできている」の回答率 DP1：0.6%、10.3%、60.9%、28.2% DP2：0.6%、16.1%、73.0%、10.3% DP3：0.0%、21.3%、65.5%、13.2% DP4：1.1%、33.9%、55.7%、9.2% DP5：0.6%、12.1%、57.5%、29.9% DP6：0.0%、30.5%、60.9%、8.6% 全項目において「ある程度できいる」と自己評価した学生が半数以上で最も多かった(昨年度と同様の傾向)。	DP6項目に対する達成度において、特に、「全くできていない」と回答された要因は明らかにできないが、クラスアドバイザーや実習統括に情報を伝え、今後の学生指導の参考にする。	教授会で報告後、該当学生のクラスアドバイザーと実習統括に報告する。

2. <在学中>

授業改善のためのアンケート	SENZOKUポータルより前期および後期の2回、【授業改善のためのアンケート】を実施（1年生は第14～15回目、2年生はシステムの都合上、第13～第14回目の時期）。2022年度以降、「ピアノⅡ」と「バイプオルガンⅡ」について【レッスン】のバージョンで実施。2023年度よりSENZOKUポータルのシステム変更に伴い、アンケート質問項目では、教員データに留まらず学生の意見や感想を拾えるよう、自由記述欄で「この授業で良かった点」「この授業で改善してほしい点」の2つを尋ねている。また、学生からのアンケート回答を受け、各授業毎に授業担当教員から、履修学生全体に向けたコメントのフィードバックを、SENZOKUポータルにて行っている。各教員からのコメントの記載については、2023年後期より、コメントの文面を教員全体に情報共有している。 過去3年間の【学生のアンケート回答率】の推移は以下の通り。 ・2022年度前期 講義全体63.38%（1年生76.79%、2年生44.97%） 後期 講義全体58.40%（1年生66.55%、2年生44.79%） レッスン 41.10% 年間平均 講義全体60.9% ・2023年度前期 講義全体73.05%（1年生87.52%、2年生56.03%） 後期 講義全体66.98%（1年生81.25%、2年生46.98%） レッスン 52.17% 年間平均 講義全体70.0% ・2024年度前期 講義全体全体79.22%（1年生89.84%、2年生63.87%） 後期 講義全体全体71.14%（1年生82.60%、2年生50.05%） レッスン 全体49.46% 年間平均 講義全体75.2% 【教員のコメント入力率】は以下の通り（2023年度より開始）。 ・2023年度前期：85% ※実際の公開は84% 後期：82% ※実際の公開は77% ・2024年度前期：90% ※実際の公開は88% 後期：90% ※実際の公開は85% ・2024年度前期：25% 後期：36% ・2023年度前期：26.5% 後期：35.3% ・2024年度前期：27.4% 後期：42.0% 集計結果および教員によるコメントは、授業担当教員および受講した学生に対し、SENZOKUポータルよりアンケート実施の約1か月後から掲示。掲示期間は前期後期とも約3～4か月。過去3年間の【学生の掲示開封率】は以下の通り。	・【授業改善のためのアンケート】の2024年度の学生の回答率は、前年度と比較し、前期後期ともに上昇した。年間平均の【講義全体】の回答率は、2023年度からは約5%の上昇だが、2022年度と比較すると約15%上昇している。学年別の回答率は、前期後期ともに前年度より上昇、2022年度と比較すると大きく上昇している。前期より後期で回答率が下がり、1年生より2年生で回答率が低い点が引き続き、課題である。 ・教員によるコメント入力率は、2024年度前期後期ともに講義では90%と前年度より上昇した（2023年度より「コメント入力率」を指標としている）。コメント入力の際に【公開】のチェック欄にレ点漏れがあるとSENZOKUポータルのシステム上、コメントを公開することができない。教員によるコメントが未入力である場合の傾向を把握した。非常勤講師であったリオムニバス科目の特性などの傾向が見られるため、該当教員への確認が必要である。 ・【レッスン】のアンケートは「ピアノⅡ」と選択科目の「バイプオルガンⅡ」に対して後期に実施しているが、2022年度からの【レッスン】の回答率は、【講義全体】の回答率と比較して低い数値である。授業改善のためのアンケートは“匿名”を原則とするが、個人レッスンではどの学生の回答かが教員側に明らかになりやすい。先述の2科目は学生には回答しづらい可能性がある。また、教員からのコメント入力しがづらい可能性もあり、【レッスン】のアンケートについて、実施の有無の検討が必要である。 ・「教員のコメント入力率」の算出においては、事務職員が、SENZOKUポータルの各教員の担当授業のクラス毎の掲示を一つずつ開いて確認する作業が必要である。【レッスン】では2科目ながら、講義全体とほぼ同数のアンケートを一つずつ開く確認作業が必要であり、分析の意義に検討が必要であることより、2024年度は【レッスン】の「教員コメント入力率」の数値の算出を行わなかった。 ・「学生の掲示開封率」では、SENZOKUポータルのシステム上、掲示の開封率が、実際に学生が個々の集計結果を閲覧した数値を表すとはいえず、指標としての曖昧さを残すが、過去3年間の推移では「学生の掲示開封率」は上昇傾向が見られる。	・前年度に引き続き、【授業改善のためのアンケート】の主旨や、学生が「双方向的」と感じられるような意義のあるアンケートとなるよう、専任教員のみならず非常勤講師およびピアノ講師への周知を行い、集計結果から教員が授業改善に活かしていくためのサイクルについての意識づけを行った。実施の主旨について、授業改善のためのアンケートの説明文の冒頭に記載するとともに、各担当教員よりアンケート実施時に受講学生に説明をしているおり、その主旨が浸透しているものと思われる。 ・PDCAサイクルの観点においても、授業改善のためのアンケートの実施、集計結果の閲覧、教員自身の振り返り、担当授業の学生へのコメントの入力、学生が集計結果と教員からのコメントを閲覧する、この流れが定着していると思われる。教員は、担当授業の集計結果を、各学期の終了後の早い時期に閲覧、担当授業での良かった点・改善点が学生から具体的に寄せられることで、授業への振り返りが習慣化し、授業改善への意識が更に高まったと思われる。また学生側は、公開されたアンケート集計結果を閲覧することで、自身の思いが伝わったと感じ、双方向と感じられるアンケートとなっていると思われる。このように、授業改善のためのアンケートにおける、学生の回答率や教員のコメント入力率、学生の掲示開封率が上昇している実態より、学生と教員、双方に、その主旨が伝わり、有意義なものとなっていると推察する。 ・学生のアンケート回答率、教員のコメント入力率、学生の掲示開封率は、更なる数値上昇を目指す。 ・教員のコメント未入力では、非常勤講師であったリオムニバス科目の特性といった傾向が見られた。引き続き、事務局からの掲示やWGからの連絡といった【授業改善のためのアンケート】の教員全体への周知を続けるとともに、科全体の課題として、学科長より、該当教員に対して実施の主旨等、改めてお伝え頂くことを予定している。 ・授業についての総合的な満足度は、4段階で3.6～3.75の辺りを推移しており、比較的高い水準である。授業についての総合的な満足度について、高い評価を維持できるようにする。 ・主に【レッスン】のアンケートの実施において、学生・教員ともに有意義な授業改善のためのアンケートとなるよう、検討を行う。
---------------	---	--	---

2. <在学中>

学外実習評価	<2023年度入学生（2025年3月卒業）の分析> ・2024年度に実施した「教育実習Ⅱ」の評価では、5項目のうち4項目で前年度の実習生より評価が上回っており、残る1項目も前年度対比わずか0.01ポイントの低下とほぼ横ばいであった。特に「日誌」の評価では、昨年度対比0.04ポイントの上昇が見られた。 ・2024年度に実施した「保育実習Ⅱ」の評価では、5項目すべて前年度比ほぼ横ばいであり、特に大きな問題は見られなかった。 ・また、2023年度生の実習の項目別評価では、1年次の「教育実習Ⅰ」から2年次の「保育所実習Ⅱ」までに着実に評価を上げていくことができていた。特に「日誌」の評価に関しては、1年次10月の「教育実習Ⅰ」から2年次9月の「保育所実習Ⅱ」との比較では3.08から3.41へと大きく上昇し、1年間の大きな成果が見て取れた。 ・上記に関しては、2年次に取り入れている「習熟度別コース制」が大きく寄与していると考えられる。	・日誌を含めた「書く力」の強化のため、「保育者のための文章表現」「教育課程論」と実習指導の連携を図り、着実に成果は上がりつつあると思われるが、引き続き毎年度検証を行い、対応策等の検討を行っていくことが必要である。 ・2019年度より、2年次の実習指導においては、「習熟度別コース制」を実施している。また、2022年度より各実習へ参加するための条件として、試行的にGPA基準を新たに導入している。これらの試みの成果についても、引き続き「学外実習評価」等による検証を行い、対応策の検討を行うことが必要である。 ・「習熟度別コース制」においては、Basicコースの力の更なる底上げが課題と考えられる。	・近年の保育者を志す受験生の減少に伴う受験志願者数の減少による、入学試験の合格倍率の低下の下、入学を受け入れる学生を短大生活2年間で如何に育て、質の高い保育者として送り出していくかを最大の課題と捉え、教職員の協働による学生への更なるきめ細かな対応を引き続き行っていく必要がある。 ・そのためにも、「学外実習評価」を左記のように継続的に検証し、対応を行っていくことが重要である。 ・Basicコースに関しては、能力の底上げが課題であるが、現状取り組みでいる個別の面談や指導を引き続き多く取り入れ、実習指導の更なる工夫や実習の再チャレンジの実施など様々な試みを継続していくことが大切である。2025年度においては、時間割上も、特にBasicコースの学生のうち特に多くの指導が必要な学生へのフォローアップを実施することが可能な体制を敷いており、引き続きその効果を検証していくこととする。 ・併せて、2022年度に策定したカリキュラムツリー等を活用し、各科目間の連携を図りながら授業を展開することで、実際の実習においても学生がより「実践力」「表現力」「協働力」を備えて臨めるようにするという認識を引き続き教員間で共有していく。 ・2021年度よりオンラインにて実施している幼稚園および保育所との年間各1回の「実習協議会」も年々参加園が増加しており、2025年度も引き続き開催し、実習園との情報共有を更に図っていくことで、学生にとって実習での経験がより実り多いものとなるよう注力していく。
成績分布	・2024年度の科目別成績分布に関して、「D」（不合格）の比率は、実習関連を除き、0%～9%の範囲に収まり、大半は0%もしくは1%で、3%が1科目、9%が1科目のみであることから、概ね妥当な水準である。 ・評価基準の目安として伝えている「S」評価（評価対象学生の3%以内）、「A」評価（S評価を含め対象学生の40%以内）に関しては、実技系科目を除き概ね妥当な水準ながら、一部科目で「S」評価の学生の割合が多い科目がある。	・左記の通り、2024年度の科目別成績分布に大きな問題はないが、1科目のみ「S」評価の割合が10%を超えていた科目がある。該当科目は、1年生前期の「保育内容（環境）」であり、「S」評価の割合は15%であった。 ・また、1科目だけ「D」（不合格）の比率が9%と比較的高い科目があった。該当科目は1年生後期の「英語（外国語コミュニケーション）」であった。	・左記1科目「保育内容（環境）」に関して、各クラス別の成績分布を確認し、各クラスの担当教員の状況の確認を行ったところ、1名の教員の「S」の付与数が突出して多いことが判明した。当該教員は2025年度は「保育内容（環境）」を担当しないが、2025年度の成績評価分布については引き続き状況の把握に努めていく。 ・左記1科目「英語（外国語コミュニケーション）」については、オンデマンド授業を行っている特殊な形態であり、2025年度も引き続き状況を注視することとする。

3. ＜卒業時・卒業後＞

項目	現状	課題	必要とされる対応
学位取得率	【2021年度】卒業予定者276名中 学位取得者263名（95％） 【2022年度】卒業予定者304名中 学位取得者294名（97％） 【2023年度】卒業予定者254名中 学位取得者249名（98％） 【2024年度】卒業予定者185名中 学位取得者185名（96％）	学位取得率に4年間大きな変化はない。	引き続き、クラスアドバイザーによる指導、二年のアドバイザーによる進路就職支援を丁寧に行う。
就職率・進学率	1996年度から2024年度まで、卒業生の就職率は100％を維持している。卒業時の保育系就職者数の割合は、以下の通り経緯している。 【2021年度】卒業生263名中保育系就職者218名（82.9％） 【2022年度】卒業生294名中保育系就職者255名（86.7％） 【2023年度】卒業生249名中保育系就職者219名（88.0％） 【2024年度】卒業生185名中保育系就職者166名（89.7％） 2023年度の保育系就職者166名の内訳は、保育所106名（63.9％）、幼稚園54名（32.5％）、施設6名（3.6％）である。 保育所就職者は、2018年度47.9％→2024年度63.9％と増加、幼稚園就職者が減少している傾向にある。 一般企業への就職は、 【2020年度】3名（1.1％） 【2021年度】8名（3.0％） 【2022年度】11名（3.7％） 【2023年度】15名（6.0％） 【2024年度】9名（4.9％）少数であるが増加傾向にある。 進学者は、 【2021年度】15名（5.7％） 【2022年度】10名（3.4％） 【2023年度】7名（2.8％） 【2024年度】5名（2.7％）と一定数を維持している。	2年生クラスアドバイザーが進路就職に関する主な相談業務を行い、事務局そのほかを支える新体制下での一年目だった。時間割にキャリアカウンセリングの時間を設け、クラス単位でのガイダンスの他、個人面談や履歴書添削等の指導をきめ細かく行い、学生基本情報シートをドライブで共有し、学生の就職活動状況を把握するなどの対策を行った結果、就職率や進学率に大きな変化はなかった。ただし、入学者の減少や社会的な保育者不足などを受け、短大に入学する動機につながるよう、就職率等の経緯は注視する必要がある。	引き続き、二年のアドバイザーによる進路就職支援を丁寧に行うほか、進路就職に有利な条件として、幼保の資格免許以外の資格取得を目指す講座のバリエーションを拡大して用意する。
免許・資格取得率	卒業時の免許資格取得率は以下の通りである。保育士資格もしくは幼稚園教諭二種免許取得者については90％を超えているが、両免許資格取得者は2021年度から85％前後である。 【2021年度】保育資格取得者239名（90.9％）幼稚園教諭二種免許取得者241名（91.6％） 両免許資格取得者226名（85.9％） 【2022年度】保育資格取得者269名（91.5％）幼稚園教諭二種免許取得者265名（90.1％） 両免許資格取得者251名（85.4％） 【2023年度】保育資格取得者219名（87.9％）幼稚園教諭二種免許取得者216名（86.7％） 両免許資格取得者203名（81.5％） 【2024年度】保育資格取得者171名（92.4％）幼稚園教諭二種免許取得者160名（86.4％） 両免許資格取得者154名（83.2％）	認定こども園の増加により、両免許取得者のニーズが高く、保育者として両免許は必須と考え、すべての取得率の目標を90％としてきたが、両免許資格取得者は2021年度から90％に至らず、資格免許取得者の割合は下がってきている。入学当初には全員が両免許資格の取得を目指しているが、実習で挫折する学生が一定数いる。	資格免許取得率を向上させることも含めて、実習指導と進路就職をより緊密に連携させる体制を構築するため、実習指導教員と進路就職WG（クラスアドバイザー）が連携して指導を行う。

3. ＜卒業時・卒業後＞

履修カルテ	<2023年度入学生(2年次)の回収率>100%。 <ディプロマポリシー(DP)6項目に対する達成度> 順に「全くできていない」「あまりできていない」「ある程度できている」「おおむねできている」の回答率 DP1：0.5%、2.7%、47.0%、49.7% DP2：0.0%、2.7%、65.6%、31.7% DP3：0.0%、3.3%、52.5%、44.3% DP4：0.0%、4.4%、67.8%、27.9% DP5：0.0%、1.6%、45.4%、53.0% DP6：0.0%、7.7%、53.6%、38.8% 2023年度入学生(1年次)のデータに比べて「全くできていない」「あまりできていない」「ある程度できている」の回答は減少する傾向にあり、「おおむねできている」の回答が増加した。特にDP1とDP5については「おおむねできている」と自己評価した学生が半数程度で最も多かった。 ※2025年4月の教授会で報告した。	1年次と2年次の2年間の結果の推移を把握したのは2023年度入学生が初めてであり、今後も継続的なデータ収集を要する。	今後のデータ収集を継続していきるように自己点検・評価委員会とカリキュラムワーキングが連携してデータ収集を行う。
卒業する皆様へのアンケート	【2024年度卒業生アンケート結果より】 授業内容や教員の対応について、82.8%（77.2%・80.1%）の学生が概ね満足と回答。事務局の対応は96.8%（94.4%・95.5%）、施設・設備は89.8%（88.4%・92.6%）の学生が概ね満足と回答。また、2年間の満足度10点満点中、平均が8.2点（7.8点・8.1点）と全体的に満足度が高い結果になっている。	全ての設問において、「満足」と回答する学生5割を目標にする。 【5割以下の項目】 2024年度（2項目）：「教員や授業内容」「入学を勧めたいか」 2023年度（3項目）：「教員や授業内容」「施設・設備」「入学を勧めたいか」 2022年度（2項目）：「教員や授業内容」「入学を勧めたいか」	集計結果を教授会で報告し共有する。 「学生対応」や「授業内容」の更なる充実を図り満足度の向上に努める。
人材ニーズ調査	・2024年度（2025年2月）実施 352施設に依頼し130施設から回答（主に保育所が中心） 調査では、以下の2つの観点から情報を収集した。 1）保育現場の「求める人材像」 2）本学卒業生に対する評価・満足度 結果として、保育現場が求める人材像と、本学卒業生への評価や満足度に関しては、同様の尺度で回答を得ることができ、大きな乖離がないことを確認することができた。本学卒業生には、「人柄」や基礎力教育に強みがあり、保育現場のニーズには概ね応えられているものの、ストレス耐性・専門スキル強化という課題が挙げられた。さらに、本学に限らず、保育業界全体の課題として、保育職志望の高校生等の減少は、長期的な大きな課題であり、保育現場としても養成校としても不安が強い。 ①【本学の強み・良さ】 ●「実践力・表現力・協働力」を柱としたカリキュラムが評価されている。●「子どもが好き」「誠実」「協調性がある」といった人柄を重視する教育方針により、現場が求める人物像とマッチした卒業生を多く輩出している。●卒業生の「明るさ」「責任感」「誠実さ」「健康」「コミュニケーション能力」「マナー」など、社会人基礎力に関する満足度が高い。●学歴（短大・四大）を問わず、現場では「人柄・やる気・意欲」を重視されており、保育現場のニーズに柔軟に応えられている。●実習や現場経験を通じた成長・現場との連携が強みとされている。●保育園から「責任感が強い」「現場でよく活躍している」と高い評価を得ている。	【本学の弱み・課題】 ●ストレス耐性や「障害児保育」「発想力」など、一部の能力・特性については満足度がやや低い。 ●保育現場への就職意欲が減少傾向にあり、「仕事が大変」「働きづらい」などマイナスイメージが学生側にあるとの懸念がある。 ●マナーや記録作業、雑務等の基礎経験・基礎力不足を感じる現場の声も一部にある。 ●「特別な専門スキル（ピアノ・歌唱・造形など）」は即戦力としては高く求められておらず、バランスの取れたスキル育成が望まれている。 ●実習生や新卒者がすぐの即戦力になるよりも「育てる」体制が必要とされており、人材の長期的な育成が課題。。	※今後は、カリキュラムや学生指導に関して、PDCAサイクルによる不断的教育改善と、学生・保育現場双方が学び続けられる仕組みづくり、保育現場のニーズと教育内容のさらなる連動が重要になる。 ●社会人基礎力（挨拶・マナー・協調性・自己管理能力等）をさらに伸ばす教育を推進する。 ●ストレス耐性や「折れない心」「セルフケア力」の育成に力を入れる（レジリエンス教育等） ●障害児保育（特別支援と保育など）、文章力（保育者のための文章表現）などの専門スキル、発想力・思考力を伸ばす機会やカリキュラムの充実を図る。 ●保育実習の質と、保育にふれる機会の充実（学生側も現場も学び合える双方向の仕組みづくり）を図る。 ●保育現場との連携に関するPDCAサイクルを維持し、外部評価・フィードバックを活かしたカリキュラム改善・教育現場の再検討を継続する必要性がある。 ●「個性」や「強み」を伸ばし、長く働き続けられる人材の育成、仕事へのモチベーション向上策を検討する。 ●就職ガイダンスの充実、仕事へのポジティブなイメージ醸成に向けた情報発信や保育現場との交流機会の拡大を目指す。 人材ニーズ調査の改善点 「性格」「能力」の観点から保育現場のニーズや本学卒業生の評価・満足度を測ったが、求められる人物像の変化や、卒業生一人ひとりの良さ・課題が異なることから、回答のしにくさは否めない項目になってきている。 ●「実践力・表現力・協働力」を柱としたカリキュラムを編成していることから、それらを細分化する項目等を開発し、適切にニーズや卒業生評価が可能となる調査に変化が必要な時期に来ているのではないかと。

令和 6（2024）年度改善・対応を要した事項等

改善・対応を要した事項等	改善結果・進捗状況等
基準Ⅰ－A 自治体との連携について、高津区との協定書締結について検討	2024 年 6 月～12 月高津区（保育所等・地域連携担当）と協議の結果、高津区と当校は現在、連携して「区内保育士等への研修」を企画実施しているが、協定まで締結する案件ではないと判断し、今後、さらに大きなまたは多くの連携が必要になった時点で協定締結の可能性を探ることで合意した。 なお、可能性の一つとして、他区や他大学の例等からは災害時の備蓄や避難所の開放などの連携が挙げられた。 一方で、2024 年度からは、従来学内で行ってきた幼児教育保育科コンサートを午前中のみ「ファミリーコンサート」として地域に開放するなど、積極的に地域貢献に努めた。
基準Ⅰ－B 卒業生が勤務する幼稚園保育所へのアンケート（人材ニーズ調査）実施	2025 年 2 月に実施し、すでに結果がまとめられている。352 施設に依頼し、130 施設より回答を得た。
基準Ⅰ－B 非常勤職員に対する SD もしくは FD 研修の実施 基準Ⅰ－C 非常勤職員との情報共有・共通認識の醸成	非常勤教員の問い合わせ窓口としてカリキュラム WG 教員を指名し対応した。同じ科目を担当する専任教員と非常勤教員の連携をより強化し、シラバス、教科書選定、試験などについての協議、情報共有を徹底した。
基準Ⅰ－C 自己点検・評価活動に高等学校等の関係者の意見聴取を取り入れる	高等学校訪問や出張授業の際に聞き取った意見をドライブシートに記入して共有→入試 WG でまとめる→入試センターと共有→年度末の教授会で報告した。これらの意見は、今後の自己点検・評価活動に活用する
基準Ⅰ－C アセスメントポリシーの運用とその活用 アセスメントポリシーに沿った自己点検を実施し、その活用を図る。	引き続き、アセスメントポリシーに沿った自己点検を実施している。
基準Ⅱ－A 「DP 達成度の傾向」を教員間で共有し、活用する。	2023 年度入学生から、履修カルテによる 1 年次と 2 年次の DP 達成度が比較が可能になり、2025 年 4 月の教授会で「DP 達成度の傾向」を報告共有した。今後の指導に活用する。
基準Ⅱ－A GPA 活用手段の強化 同一科目を担当している教員間で、授業態度、課題、試験内容、成績基準等についての共有や確認を行い、GPA との関連を探り、GPA の低下傾向に対策を施す。	同一科目を担当している教員間において、授業態度、課題、試験内容、成績基準等についての共有や確認を行った。 GPA 不芳学生について、クラスアドバイザーを中心に GPA 向上を含めた総合的支援を行った。
基準Ⅱ－A コミュニケーション力の育成など汎用的能力の測定についての方法を確立し、測定データを可視化する アセスメントポリシーに沿った自己点検によ	2023 年度入学生から、1 年次から 2 年次の履修カルテによる DP 達成度の比較が可能になった。コミュニケーション力の育成に関しては、DP5（社会性および協働意識）の達成度によって明らかになった。

て、その方法を検討する。	2023 年度入学生の 1 年次には「ある程度できている 57.8%」と「おおむねできている 32.4%」で計 90.2%。2 年時には 45.4%と 53.0%で計 98.4%と向上している。
基準Ⅱ－A カリキュラムツリーの運用を開始	カリキュラムツリーの運用を開始し、科目間の連携を図りながら授業を展開するよう、教員に促した。
基準Ⅱ－B 学生の社会的活動の評価を行う方法として、学生のボランティア等の社会的活動に関し、表彰を行うための評価方法等に関して検討する（前田記念賞に代わるもの）	引き続き、検討課題とする
基準Ⅱ－B 入学予定者の学力水準を的確に把握し、前年度の「新入生の皆様へのアンケート」の結果等も参考に、入学予定者オリエンテーションの内容を精査し、質の向上を図る。	引き続き、入学予定者の学力水準を的確に把握し、前年度の「新入生の皆様へのアンケート」の結果等も参考に、入学予定者オリエンテーションの内容を精査した結果、登校とオンラインのオリエンテーションを実施し、より円滑なコミュニケーションが図れるようワークショップ等を多用した。
基準Ⅱ－B 「授業改善のためのアンケート」の結果の閲覧の促しを徹底する。	アンケートの回答率は、年々上昇（2020：65.1% 21：62.9% 22：60.9% 23：70% 24：75.2%）しており、昨年度から実施している教員のコメント入力も定着して 90%の教員が入力、これを読む学生の掲示開封率も上昇してきている。
基準Ⅱ－B 「卒業する皆様へのアンケート」の集計結果を教授会で報告する	「卒業する皆様へのアンケート」の集計結果を教授会で報告し、今後の改善につなげるすべての項目において、「満足」を 5 割以上にしたいという目標を掲げ、教員の意識向上を図った。
基準Ⅲ－A オンラインシステムを活用した教員間の連携を図る。	Google drive やスプレッドシート等を活用するほか、専任教員のクラスルームを活用し、情報共有ができています。
基準Ⅲ－A I C T 化による事務局の業務改善	Google drive やスプレッドシート等、事務局の業務改善に貢献している。学園全体の ISMS 定期教育が行われ、情報セキュリティ理解度についても教職員の意識向上がなされている。
基準Ⅲ－B 保育・子育て研究所主催事業として、絵本の部屋を活用し、蔵書の充実を図る事業展開を行う。	絵本の部屋において卒業生や教職員による「おすすめ絵本紹介」、1.2 年生全員に呼びかけて「読み聞かせコンテスト」を行った。
基準Ⅲ－C 学生に倫理面に関する情報教育の一層強化を図る	引き続き「情報機器の操作」を必須科目として、近年の情勢をふまえた情報モラル習得の強化を行う。
基準Ⅳ－A 保育者養成校の全国及び近隣の状況を把握・分析するとともに、2024 年度入試の状況を勘案し、入学定員の見直しの必要性を引き続き検討する。	本学の入学希望者の状況のみならず、保育者養成校の全国及び近隣の状況を把握・分析した結果、2025 年度入学者から入学定員を 250 名から 150 名に減員したため、必要な学則変更申請及び届け出の手続きを行った。

(第4評価期間から適用の短期大学評価基準による)

	現状／要改善・対応内容
<u>基準 I—A—1 建学の精神を確立している</u>	2024 年は建学 100 周年であり、日本武道館において周年行事が行われた。記念に制作発表された建学の精神を分かりやすい形で学ぶことのできるミュージカルを全学生が鑑賞するなど、建学の精神の浸透につながる機会を積極的に設定することが今後の課題である。
<u>基準 I—B—1 教育目的・目標を確立している</u>	建学の精神に基づき、学則の中で、人材養成及び教育研究上の目的を定めている。この教育目的・目標に基づく人材養成が地域・社会の要請に込えているかについては、本学卒業生が勤務する幼稚園・保育園に対し人材ニーズ調査を実施し、本学卒業生に対する満足度等を取りまとめ、分析等を行うことで定期的に点検している。今後は、PDCA サイクルによるカリキュラムや学生指導の改善、保育現場のニーズと教育内容の連動を向上させる。
<u>基準 I—B—2 学習成果を定めている</u>	学習成果を定め、ホームページ上に掲載し、学生向けには「履修要項」に卒業認定・学位授与の方針と併せて掲載する等、学内外に向けて表明している。また、科目レベルに関しては、シラバス上で各科目ごとに到達目標として具体的に明示し、ホームページ上でも公開している。今後も定期的な点検が必要である。
<u>基準 I—B—3 3 つの方針を一体的に策定し、公表している</u>	三つの方針を踏まえた教育活動を行っていくために、専任教職員に対しては、教職員合同 SD 研修会等を通じて、共通認識を持てるよう努めている。 一方で課題であった非常勤教員に対しては、Zoom 等を活用し、カリキュラムワーキンググループが中心となり説明会を実施している。今後の継続が必要である。
<u>基準 I—C—1 高等教育機関として地域・社会に貢献している</u>	本学の人的物的資源を活用し、リカレント教育など地域から求められている地域貢献活動に取り組む必要がある。また、これまでも幼児教育保育科コンサートや洗足学園フェスティバルなどで行ってきた地域の子どもとその家庭に向けたイベントもより強化する。
<u>基準 I—D—1 自己点検・評価活動等の実施体制を確立し、内部質保証に取り組んでいる</u>	毎年度自己点検・評価委員会が自己点検・評価活動の方針を決定し、この方針に基づき各委員会、ワーキンググループ、事務部門が自己点検・評価活動を実施し、自己点検・評価委員会は活動結果を点検し、報告書を作成している。PDCA サイクルによりこの結果を活かすよう努める。
<u>基準 I—D—2 教育の質を保証している</u>	学習成果を焦点とする査定(アセスメント)を次のような手法を活用して行うことで、教育の質の保証に繋げている。量的な査定としては、成績評価結果、免許・取得率、専門職就職率、「幼稚園・保育園からの実習評価」等。定性的な査定としては、「授業改善のためのアンケート」、「履修カルテ」、「新入生の皆様へのアンケート

	ト」、「卒業する皆様へのアンケート」、本学卒業生が勤務する幼稚園・保育園に対する「人材ニーズ調査」等である。今後、査定手法の定期点検を行うことが求められる。
<u>基準Ⅱ—A—1 卒業認定・学位授与の方針に従って、単位授与、卒業認定や学位授与を適切に行っている</u>	卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)は、学習成果のそれぞれの項目に対応しており、卒業の要件、成績評価の基準、資格取得の要件を明確に示している。各科目のシラバスにはDPに対応する目標が明記されていることから、履修カルテでこれらを自己点検することができ、学生自身も付与された成績を理解し、単位・卒業認定や学位授与が適切に施行できる仕組みがある。
<u>基準Ⅱ—A—2 教育課程編成・実施の方針に従って、教育課程を編成している</u>	いずれの学年でも充実した学修ができるよう、体系的に教育課程を編成している。教育課程編成・実施の方針に従って、免許・資格取得に必要な科目を中心に「実践力」を養う科目、音楽等を核にした「表現力」を養う科目、それらを総合的に生かして「協働力」を養う機会を提供する科目をバランスよく編成し、カリキュラムマップに示している。 また、単位の実質化を図り、学修すべき授業科目を精選することで十分な学修時間を確保し、授業内容を深く真に身につけてもらうことを目的として、年間履修登録単位数の上限を定めている。
<u>基準Ⅱ—A—3 教育課程は、短期大学設置基準にのっとり、幅広く深い教養を培うように編成している</u>	短期大学設置基準にのっとり教養教育科目は幅広く深い教養を培い、豊かな人間性を身につけるための内容を考えて、編成している。特に、本学の特徴でもある行事や選択科目、特別研究等、発表機会のあるものについては、内容も幅広くより充実させていく。
<u>基準Ⅱ—A—4 教育課程は、短期大学設置基準にのっとり、職業又は实际生活に必要な能力を育成するよう編成し、職業教育を実施している</u>	幼稚園教諭及び保育士という専門職養成校であるので、入学前教育から卒業に至るまで保育者になるという就職後を見据えた教育内容を体系的に展開している。2025年度からは、さらに幼稚園教諭・保育士の資格免許以外に、幼児教育保育に関する資格等を取得する機会を増やしていく。
<u>基準Ⅱ—B—1 短期大学及び学科又は専攻課程において、学習成果は明確である。</u>	学生は、シラバスに示された各科目の到達目標の記載から、具体的に何をどのように学び、身につけるのか、どのようなことができるようになるのかを、ディプロマ・ポリシーとのつながりとともに具体的に知ることができる。また、各科目は、学生が学習成果を獲得できるように授業計画が立てられ、履修カルテを用いて、学生自身が各科目の学習成果の獲得状況を理解できるようにしている。
<u>基準Ⅱ—B—2 学習成果の獲得状況を適切に評価している</u>	教員は、それぞれの担当科目において、シラバスに示した成績評価基準に照らし合わせて、学習成果の獲得状況を評価し、学習成果の獲得状況を適切に把握している。学習成果の達成度を確認する手段の一つとして、履修カルテについては、カリキュラムワーキンググループが中心になって議論を重ね、全教員が必要に応じて閲覧し活用できる体制を整えている。

<u>基準Ⅱ—B-3 学習成果の獲得状況を量的・質的データを用いて測定する仕組みをもっている</u>	学習成果の獲得状況は、基礎力リサーチを元データとし、GPA 分布、単位取得率、学位取得率、免許・資格取得率、退学率・休学率、就職率・進学率、履修カルテ、学外実習評価、授業改善のためのアンケート、卒業する皆様へのアンケート、人材ニーズ調査の量的・質的データを用いて測定している。
<u>基準Ⅱ—B-4 学習成果の獲得状況の公表に努めている</u>	学習成果は量的・質的データに基づき評価し、ホームページの「情報の公開：教育情報」において、進路、卒業者数、学位授与率、卒業生進路一覧、ジャンル別進路数（就職率・進学率）、免許・資格の取得状況（人数）、授業改善のためのアンケート結果を公表している。
<u>基準Ⅱ—C-1 入学者選抜は公正かつ妥当な方法により、適切な体制を整えて実施している</u>	入学者受入れの方針は、学校案内とともに受験生に配布する「入試情報」や「入学者選抜要項」及びホームページで開示している。 短期大学と併設の音楽大学の入試業務を統括する「入試センター」を専門の部署として設置している他、短大教員よりなる「入試ワーキンググループ」、短大事務局の職員が協力する体制を整備している。入試センターは、学生募集から入学手続きまでの一連の業務や広報を主に担い、入試の方法や内容に関しては、入試ワーキンググループや入試センターで検討された案について教授会で協議した後に学長が決定する体制である。
<u>基準Ⅱ—C-2 入学者選抜に関する情報を適切に提供している</u>	「総合型選抜」「学校推薦型選抜」「一般選抜」について選考基準を明確に示し、募集人員、授業料、その他入学に必要な経費は、「入試情報」等で明確に示している。 高校への出張授業やオープンキャンパスをこまめに多様な形態で実施し、本学の魅力をより発信できるよう情報提供を行っている。
<u>基準Ⅱ—D-1 学習成果の獲得に向けて学習支援を組織的に行っている</u>	クラスアドバイザー制度を導入しており、各クラスに専任教員 1 名をクラスアドバイザーとして配置し、修学上の相談の窓口となっている。授業担当教員とアドバイザーは学生の情報を共有し連携して支援している。また、SENZOKU ポータルや Google Classroom の活用により、課題や提出物の管理等がしやすくなっている。
<u>基準Ⅱ—D-2 学習成果の獲得に向けて学生の生活支援を組織的に行っている</u>	学生の生活支援のための教職員の組織として「洗足学園音楽大学・洗足こども短期大学学生生活サポート委員会」を設置している。また、クラスアドバイザーを中心に全教職員が連携をとりながら、相談支援体制を整えている。 図書館 1 階のレコメンドコーナーに絵本、保育・幼児教育関連の専門書、実用書を配架している。また、2 階のレファレンスコーナーには、保育・幼児教育関連の事典、年鑑等を配架している。更に、キッズスクウェア 4 階に“絵本の部屋”を設置し、より身近な場所でいつでも参考図書が活用できるよう、絵本や幼児図書を併せて約 3,800 冊開架し、有効に利用できるようになっている。今後は、これらの資源をよりよく整備し、地域に開放する機会等を増やすことが課題となる。

<u>基準Ⅱ—D-3 進路支援を組織的にやっている</u>	進路支援のため、学生の実態を把握でき、かつ、学生側が相談しやすい 2 年生のクラスアドバイザーと事務局主任で構成する「進路就職ワーキンググループ」を設置し、教職員が協力する体制を整備している。週に一度クラスごとに「キャリアカウンセリング」の時間を設け、就職に関する指導をしている。また、ネット上のシステム「ENMAP」を志望園の選択、情報の収集に活用できるよう用意し、活用を促している。
<u>基準Ⅲ—A-1 教育課程編成・実施の方針に基づき、教員組織を配置している</u>	専任教員の職位は真正な学位、教育実績、研究業績、制作物発表、その他の経歴等、短期大学設置基準の規定を充足しており、これらの情報はホームページ上で公開している。また、教員の採用、昇任については、「洗足こども短期大学教員人事規程」「洗足こども短期大学人事委員会規程」「洗足こども短期大学専任教員選考規程」等に基づいて適切に行っている。
<u>基準Ⅲ—A-2 教員は、教育課程編成・実施の方針に基づき教育研究活動を行っている</u>	専任教員においては学内での教育・指導に加え、実習先巡回を含む多面的な学生指導が求められる。こうした状況下でも、各教員は専門分野の学会に所属し、自身の研究活動、社会活動を積極的に行っており、専任教員の研究活動は、教育課程編成・実施の方針に基づいて成果をあげている。年度ごとに行う学長面談では、研究活動について進捗状況を聞き取り、より活発な研究活動を促している。さらに、教員が行っている研究テーマ等は、ホームページ上で「教員紹介」としてわかりやすい形で一般に公開している。
<u>基準Ⅲ—A—3 学習成果の獲得が向上するよう、事務職員等を配置している</u>	短期大学事務局は、短期大学に関する事務処理全般を大学の各部署と連携を取りながら管理・運営及び教育・研究活動をサポートしている。事務職員には各自専用のパソコンを配付し日常の業務を円滑に行っている。また、学習成果を向上し、学生の利便性を高め、加えて各種業務の効率化を図るべく、「教学系システム」と「ポータルシステム」を活用し教学面のサポートを行っている。
<u>基準Ⅲ—A-4 学習成果の獲得に向けて、教職員の役割や責任を規程している</u>	委員会とワーキンググループの分掌により、教職員の役割や責任を明確である。また、授業シラバスにおいて学習成果と評価方法を明示することにより、授業運営における教員の責任を明確にしている。アドバイザー制度によって、クラスの学生の学習生活全般における相談窓口となる役割が示されている。また、教職員は、Google drive やスプレッドシート、専任教員のクラスルームで情報共有をし、それぞれが連携協力してその責務を果たしている。
<u>基準Ⅲ—A-5 教職員等の資質、教育能力、専門的能力が向上するよう組織的な研修を実施している。</u>	「洗足こども短期大学 FD 委員会規程」に基づき、FD 委員会が内容を企画し、研修を実施している。これら FD 活動の成果によって、教員は授業・教育の改善を図り、学生の学習成果の獲得向上に努力している。さらに、学園全体の FD/SD にも参加機会を設け、積極的な参加を促している。

令和7(2025)年度改善対応を要する事項

(第4評価期間から適用の短期大学評価基準による)

改善対応を要する事項	要改善・対応内容
<u>基準Ⅰ—A—1 建学の精神を確立している</u> 建学の精神の一層の浸透	建学100周年を記念し、2024年に制作発表された学園創立時のエピソードを元にしたミュージカルを全学生が鑑賞するなど、建学の精神の浸透につながる機会を積極的に設定する。
<u>基準—B—1 教育目的・目標を確立している</u> 人材ニーズ調査の結果を反映させたカリキュラムや学生指導内容の改善	本学卒業生が勤務する幼稚園・保育園に対し2024年度に行った人材ニーズ調査を活かし、PDCAサイクルによるカリキュラムや学生指導の改善、保育現場のニーズと教育内容の連動を向上させる。
<u>基準Ⅰ—C-1 高等教育機関として地域・社会に貢献している</u> 地域社会に貢献する	これまで継続されてきた地域区役所と共同事業の維持に加え、本学の人的物的資源を活用し、リカレント教育など地域から求められている地域貢献活動に取り組む必要がある。また、これまでも幼児教育保育科コンサートや洗足学園フェスティバルなどで行ってきた地域の子どもとその家庭に向けたイベント、特別研究などの一環として行ってきたボランティア活動などもより強化する。 学生のボランティア等の社会的活動に対する評価方法について引き続き検討し、学生が主体的に地域貢献活動に目を向けるよう指導する。
<u>基準Ⅱ—A—3 教育課程は、短期大学設置基準にのっとり、幅広く深い教養を培うように編成している</u> 教養教育科目の一層の充実	短期大学設置基準にのっとり教養教育科目は幅広く深い教養を培い、豊かな人間性を身につけるための内容を考えて、編成している。特に、本学の特徴でもある行事や選択科目、特別研究等、学生の主体的な学習意欲につながるものについて、内容も幅広くより充実させていく。
<u>基準Ⅱ—A—4 教育課程は、短期大学設置基準にのっとり、職業又は实际生活に必要な能力を育成するよう編成し、職業教育を実施している</u> 幼稚園教諭免許・保育士資格に加えて取得できる資格免許の講座を開設する	幼稚園教諭・保育士の資格免許以外に、幼児教育保育に関する資格等を取得する機会を増やしていく。具体的には資格試験のための講座、資格認定に直接つながる講座等の開講、又は外部の資格講座の積極的な紹介などである。 クラスルームでの紹介のみならず、各授業科目内でその意義を積極的に説き、一定の免許資格に付加価値を付与し、さらに学生が自信を持って保育にあたることができるよう促す。
<u>基準Ⅱ—C-2 入学者選抜に関する情報を適切に提供している。</u> 出張授業やオープンキャンパスの改善・充実	高校への上張授業やオープンキャンパスをよりこまめに多様な形態で実施し、本学の魅力をより多く発信する。